みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「東南アジア少数民族の年代記と歴史研究：ベトナムにおける黒タイ年代記の分析から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 樫永, 真佐夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4842

東南アジア少数民族の年代記と歴史研究

ベトナムにおける黒タイ年代記の分析から

樫永 真佐夫

インドシナ半島北部の国境線

地図を開いてインドシナ半島北部をみていただきたい。中国、ベトナム、ラオス、タイ、ミャンマー、インドの六カ国の国境線が交差している。もちろん、ここでは言語、物質文化、生業、社会組織、信仰形態など多くの文化要素を共有する諸民族が、国境をまたがって近代以前から暮らしてきた。そのため文化的に大きなまとまりをもっているこの地域を「タイ（Tai）文化圏」とよび、この圏域の文化と社会を学際的かつ歴史実証的に解明する研究も進展しているが[1]、このような地域で研究していると、国境線によって何が変わって、何が変わっていないのか、考えないわけにはいかない。本稿で扱うのは、変わった「歴史」の方である。

先述の六カ国の国境線は、一九世紀末から二〇世紀初めにかけて、イギリス、フランス、中国、タイ国の外交交渉によって画定した。その線引きが現在までほぼ引き継がれている。当然、その線引きは、上記四大国の政治的思惑が交雑する

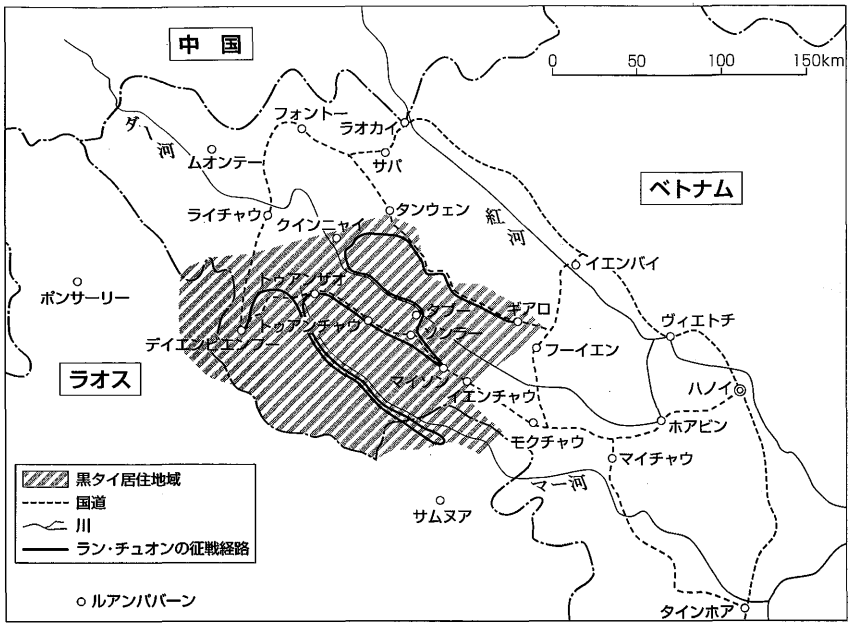

図1　黒タイ分布とラン・チュオン征戦経路

結論の一つであった。しかし、だからといって列強進出以前の、まさに「タイ文化圏」における地政学が無視されたわけではなかった。それは、一九世紀後半にはイギリスのスコットやフランスのパヴィらによる探検がすでに始まっていて、その成果が国境画定に大きく影響したからである。つまり、探検家たちは、鉱産資源や森林資源など現地の経済価値を計ったり、地図を作成したばかりではなかった。現地首領たちの支配領域、朝貢や同盟関係、彼らの出自、経済基盤なども精査した。そうした歴史・文化・社会に関する地域情報が、外交交渉によって国境線を決める際の根拠となったのである。

タイ文化圏内には、ライチャウの白タイ首領のように一九世紀末まで中国、ベトナム、ラオスなど、外部の複数の王権に多重朝貢していた勢力もたくさんあった。しかし国境線画定の頃から、それぞれの勢力が近代国家の領域の垣根をこえて独自に外交政治をおこなうことは、次第に抑圧された。そして二〇世紀前半のうちに、現地首領たちは特定の領域内で行政権を行使できるだけの地方官僚への変質を余儀なくされた。

彼らの変質は、各近代国家が領域内の政治経済や文化の統合を実現するために、不可避の過程であった。その後一九七〇年代まで、東南アジア大陸部の諸国家は、反植民地闘争、二度の世界大戦、東西冷戦下での独立運動、社会主義化など、めまぐるしい政治変動を経験する。やや乱暴だが、ふり返ってみるとこれらはすべて、列強を除外した土着の近代国家統合へと向かう大奔流の中の出来事として、概括できるのである。

ベトナム西北地方史の再構成

本稿はベトナムの地方史を対象とするため、ベトナム北部に話を絞ろう。一九四五年ホーチミンによる八月革命後に発足したベトナム民主共和国（一九四五～一九七五）とベトナム戦争終結後のベトナム社会主義共和国（一九七六～）では、政府が一貫して多民族・多文化主義を標榜してきた。とはいえ、一九八〇年代末に市場経済化政策がはじまるまで、実地には国家領域内の文化的均質性の確立に、中央と地方の政権はことさら尽力してきた。

国民形成の過程で、全国レベルでの文化的均質性の確立と、前近代に遡っても国内が均質であったという「物語」の生成は表裏一体である。たとえばタイ文化圏の一部をなし、白タイ、黒タイ各首領がときには競合的に割拠していた現在のベトナム西北地方は、フランス植民地期までシプソンチャウタイとよばれていた。各首領たちは中国、ラオス、ベトナムの諸王朝に多重朝貢しつつ政治的な自律を保ってきたのである。しかし一九四五年以降、ベトナム共産主義者たちは、紅河デルタを中心に歴代王朝を興亡させてきたキン族（ベト族）とシプソンチャウタイの住民たちが前近代から政治、文化、経済的に密接に関わりあってきたことを強調した。その後、民族自治区（一九五五～一九七五年）設置を経て、同地は西北地方というベトナムの一地方として、明確に位置づけられていく。

ベトナムにおける西北地方の位置づけには、歴史学や民族学も貢献した。西北地方をめぐる前近代の漢文資料は多くは

ない。そのため、とくに一九六〇年代以降は、西北地方史の再構成に黒タイ文書研究の成果が積極的に取り込まれた。参照されたのは、年代記類である。では、その黒タイの年代記はどのように生かされたのか。また年代記記述に基づく歴史再構築の限界とは、どのようなものだろうか。以下では、年代記の生産と再生産、用法、内容などについて、社会のつながりも視野に入れつつ、その回答をこころみたい。

黒タイの社会・文化と文字文化

年代記の分析にはいる前に、西北地方の社会と、ターイ（特に黒タイ）の文字文化の概況を示しておこう。

今日のベトナム社会主義共和国では、言語的特徴、生活・文化的特徴、民族的自意識という三つの指標に基づいて、五四の民族が公定されている。これは諸民族の平等を掲げた民族政策実施のためである。総人口約七六〇〇万人のうち八六％をキン族（ベト族）が占めている。残り五三の少数民族のうち二番目に人口が多い民族が、人口一三三万人を擁するターイ（Thái）である（一九九九年人口調査）。黒タイや白タイは、ベトナムではともにターイの地方集団とされる。ほぼ盆地ごとに黒タイと白タイの居住地域が分かれているが、両者の言語、物質文化、風俗習慣の差異は小さい。両者とも盆地を中心に伝統的に灌漑水田耕作をおこない、ムオン（ムアン）とよばれる首領を頂点とする階層的な政治組織を築き、山地に住む周辺諸民族に支配を及ぼしていた。この点は、前近代のタイやラオスのタイ語系諸集団と共通している。いっぽう、上座仏教を受容していない点、姓や財産が父系的に継承される点は顕著な相違点である。

上座仏教徒のタイ語系集団は、一般的に貝葉（ばいよう）にタム文字を刻したパーリ語仏典を伝えている。いっぽう、黒タイや白タイは貝葉文書を継承せず、いずれも古クメール系の固有文字を数百年にわたり紙に記して継承してきた。これらは歌謡、文学、呪術・祈禱書、年代記、慣習法などに分類できる。ソンラー省のターイ文字資料庫に保管されている約一五〇〇の

文書のほとんどが歌謡や文学である。管見の限り、日常生活の生の様子を記したターイ文書はない。ターイ文字を読み書きする人は、植民地期以前でも支配階層の人々や宗教的職能者などにほぼ限られていたと思われる。

注意すべきは、近代国家に取り込まれる以前にも、ターイ文字以外の文字が同地では用いられていたことである。たとえば各首領が居住する各盆地の中央部に形成された市場には、漢字を用いる漢人やキン族の商人がいた。また、黒タイや白タイの支配階層の中にも、外交上の必要もあって漢文を駆使する人がいた。さらに、フランス植民地政府によってインフラストラクチャーと行政が整備された一九一〇年代からは、学校教育でクオック・グーとよばれるベトナム語ローマ字表記やフランス語が用いられた。とはいえ、それらの普及もかなり限られていた。一九五四年のフランス撤退以降にベトナムの国民教育で採用されたクオック・グーが、ターイの間でもいちばん普及した文字である。

黒タイ年代記

タイ語系諸集団が継承してきた歴史ジャンルの文献は、総じて年代記とよばれている。階層区分が明確な彼らの社会では、統治者の出自を明確にしておくことが重要であり、そのため年代記では王や首領の世系、つまり王統をその起源から物語ることがなによりも大切であった。ターイが継承してきた豊富な文書群のなかで、西北地方史の再構築と密接に関わったのは年代記である。

黒タイ年代記としては『クアム・トー・ムオン』、『クアム・ファイン・ムオン』、『タイ・プー・サック』と題された文書群が非常によく知られる。マイチャウやモクチャウなどに住む白タイも年代記を継承してきたが、西北地方史の再構成との直接の関わりは薄いので、本稿では黒タイ年代記の分析に絞る。以下で、それらの内容、成立年代、用法について簡潔に説明しておこう。

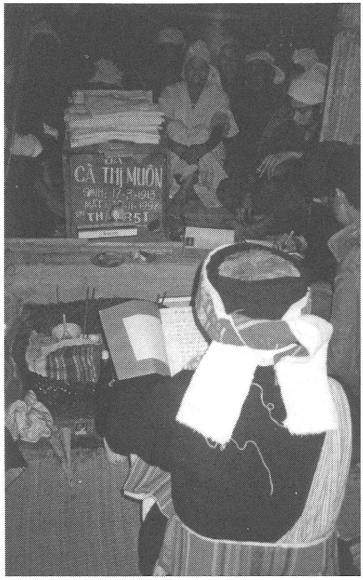

図２　葬式で「クアム・トー・ムオン」を読むところ（ディエンビエン省トゥアンザオ県，1997年）

『クアム・トー・ムオン』は、天地開闢（かいびゃく）に始まり、ギアロに始祖が降臨し、ムオンがそこに最初に築かれて以来の各首領の系譜と事績を説いている。その成立年代は、ベトナム語からの借用語が非常に少なく全体的にことばや表現が古いことから、一九世紀以前に遡るであろう。『クアム・トー・ムオン』は、各首領一族の霊魂と「ムオンの精霊」を守護し、その安寧祈願を司る宗教職の長モ・ムオンが書き記した。首領の葬式の際に、没したばかりの首領の事績を書き加えた新しいバージョンの『クアム・トー・ムオン』を読誦し披露した。その後、モとよばれる民間の宗教的職能者などを通じて、その写本が流布し、人々の葬式でも読誦された（図２）。社会主義体制下では、前近代的かつ封建的な内容をもつとして批判されたため、人々がその所持と使用を自粛した時期もある。とはいえ現在でも各地村落で散見する。

『クアム・ファイン・ムオン』は、『クアム・トー・ムオン』に基づいている。ソンラー、トゥアンチャウ、マイソンでは『クアム・トー・ムオン』よりもよく目にする。平易な語彙による韻文なのは、首領たちの公の饗宴で歌われたからである。成立年代は、ベトナム語の影響から推して、一九から二〇世紀にかけてだろう。

『タイ・プー・サック』は、語彙から判断する限り、成立年代が『クアム・トー・ムオン』や『クアム・ファイン・ムオン』より古い。内容は、ギアロ盆地を最初に開いたとされる始祖タオ・ロから、ロ・レットを経て、中越両王朝の領土問題が顕在化し始める一八世紀頃までの首領の事績である。サーとよばれるカダイ語系やモン・クメール語系などの先住異民族たちを平定して黒タイの領土を築いたラン・チュオンをはじめとする英雄祖先の伝承が詳しい。ソンラー、トゥア

ンチャウ、マイソンで数年に一度開催された共同体の大祭礼で、モ・ムオンをはじめとする宗教役職者が踊りながら、これを唱歌したというが、その最後は一九三〇年代である。『クアム・トー・ムオン』、『クアム・ファイン・ムオン』と異なり、希少文書である。[2]

西北地方史

二〇〇二年にカオバンにて西北地方史をテーマとして開催されたベトナム・タイ学プログラム会議[3]、二〇〇五年にソンラー省人民委員会が編纂した地誌[4]では、歴史家、民族学者による西北地方史の通説の概略が示された。大筋は以下のようなものである。

黒タイの祖先タオ・スオンとタオ・ガンは、中国雲南省の紅河源流域から下ってまずギアロ（ムオン・ロ）の盆地に定住した。タオ・スオンの長男タオ・ロが嗣いでギアロを食邑したが、タオ・ロの七人息子の末子ラン・チュオンには相続できる土地がなかった。そこで一一、一二世紀頃、千とも万ともいわれる兵を率い、新天地を求めてギアロを去った。彼はサーと総称される異民族たちの反抗を平らげながら、クインニャイ、ムオンブー、ソンラー、マイソン、トゥアンチャウ、トゥアンザオ、ディエンビエンを征服して勢力範囲を広げた。

一二～一三世紀には、タオ・チエウがディエンビエンを去ってライチャウを食邑した。それまでライチャウは、黒タイとは異なりシップソンパンナ付近から下った北部白タイの首領が食邑していたが、この時期にライチャウに黒タイの政治組織が持ち込まれた。同じ一三世紀頃、ターイの政治的中心はディエンビエンからトゥアンチャウに移った。ロ・レット（別名グー・ハウ（コブラの意味））、タ・カム、タ・ガンの三代がトゥアンチャウの全盛期であった。その後、十五世紀にはモクチャウの白タイ首領サー・カ・サム（車可参）が台頭し、中国明朝による侵略を受けたベト

ナム黎朝を支援する。さらに、一七世紀には首領ブン・ファインがソンラーに覇権をもたらす。一八世紀には、紅河デルタの農民反乱を煽動したホアン・コン・チャット（黄公質）が、黒タイや白タイの首領たちを味方に付け、ディエンビエンに立てこもってベトナム黎朝に対抗した事件が、広くベトナムで知られている。一九世紀以降は中国からの匪賊（ひぞく）の侵入に悩まされ、さらには一九世紀後半にフランスによる植民地支配下に組み込まれた。

上記のような西北地方史のあらましは、一九六〇年代からダン・ギエム・ヴァンやカム・チョンを中心に記述され、一九七〇年代にはほぼできあがっていたものである。[5] これにはソンラー、トゥアンチャウ、マイソンなどの『クアム・トー・ムオン』写本のベトナム語訳と紹介の成果が大いに反映されている。[6]

『クアム・トー・ムオン』の内容

既述の通り『クアム・トー・ムオン』は、天地開闢と洪水、天からの始祖降臨、故地ムオン・ロの開拓、ラン・チュオンによる領土拡大、その後の歴代首領の事績と歴史的事件の数々を記している。現存の写本の多くが二〇世紀のものなので、語りの終点はしばしばフランス植民地期である。以下では、トゥアンチャウにおいて一九六五年から一九六七年に筆写されたルオン・ヴァン・ティックによる写本（図3）から、その内容を示したい。

その記述の大部分が、ラン・チュオン以降の王統史である。そこから以下のような社会秩序が読み取れる。

一　領土と領民の生産活動

ムオンは、盆地という地理空間、水田の生産力に基づく領民の生活、土木事業や共同体儀礼を組織する階層的な政治・統治機構によって特徴づけられる政体であった。

ギアロの大盆地を出発したラン・チュオンは、従った千とも万ともいわれる軍隊を養うため、異民族の諸勢力に押し戻されたり迂回したりしながら征戦を繰り返し、ついにディエンビエンの広大な盆地に至った。水田開発で領民の生活を保証しようとしたからである。

興味深いことに、ラン・チュオンの征戦経路に位置する各ムオンの分布と黒タイの現在の分布地域がかなり一致している（二頁図1参照）。いっぽうこれまでの歴史学の成果は、この数百年の間に東西南北からさまざまな勢力に黒タイ社会が脅かされてきたことを語っている。とすると、ラン・チュオン以来、四〇代も経る間、黒タイの領土と文化の統一が維持されてきたとは考えにくい。むしろ黒タイが集中する各盆地とその勢力範囲に基づいて、ラン・チュオンの征戦経路が編集されたと仮定した方が自然であろう。

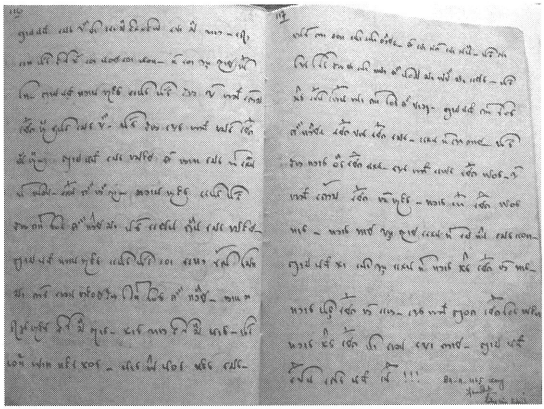

図3　ルオン・ヴァン・ティック本『クアム・トー・ムオン』。最終頁には，書写者の署名がクオック・グーで記されている。

二　民族間関係

ラン・チュオンは敵対するたくさんのサーの首領を制圧した。一九四五年までサーは、ムオン政体の中で半隷属民としてさまざまな労働奉仕を義務づけられていた。また、黒タイはサーとの婚姻を好まなかった。しかし、実際には、ラン・チュオンおよびロ・レットら、『クアム・トー・ムオン』でもっとも重要な黒タイの祖先たちは、前者はサーと婚姻し、後者はサーを母としている。こうしたサーとの姻戚関係に関する記述は、ムオンの繁栄と秩序の安定のためにサーの存在が不可欠なことを示しているのであろう。

近年に至るまで、黒タイの物質生活にとってサーの存在はなおも重要であ

った。サーは籐や竹細工にすぐれ、現在でも黒タイの村でふつうに見られる葛籠や、大小各種のザルなど多くの生活物資が、サーによってつくられているからである。(7)

三　首領地位の継承

『クアム・トー・ムオン』からは、首領の地位が父子相承の原則で継承され、やむを得ない場合は弟が嗣ぐことが読み取れる。しかし、ラン・チュオンからトゥアンチャウ最後の首領バック・カム・クイまでが一系でつながっているわけではない。むしろ数々の首領の後継者争いの様子がそこに記されている（図4）。

各ムオンの政治的安定のために黒タイ首領たちがとった方策は、一つは政略婚による同盟関係の維持であり、もう一つは、外部の安定した宗主国にその権威を保証してもらうことであった。実際、『クアム・トー・ムオン』には、他のムオンから首領が妻を娶ることが幾十も記述されているし、後継者争いがルアンパバーンに王都を持つラオスの介入によって終息させることができたという記述もある。また首領たちが、ラオスやベトナムの王朝、一九世紀後半以降はフランスによって認証されていたことも、随所に記述されている。

四　貴族と平民の階層秩序

『クアム・トー・ムオン』は、首領の即位に際して誰が行政と儀礼（宗教・慣習）を司る「長老会」の重要な役職に就いたかを記している。長老会は、ラン・チュオンの父系子孫として貴族姓を継承する一族からではなく、平民姓の者たちから選出された。いっぽう、首領の就任を承認するのは長老会であり、ときには首領を罷免することもできた。

とはいえ長老会の者が、首領を出し抜いてムオンの元首となることは許されなかった。ラン・チュオンから三十数代下った首領サン・ギアの代に、一つの反逆事件が起こっている。事件後の混乱は、ベトナム王朝の力を頼ってもムオン・ラ

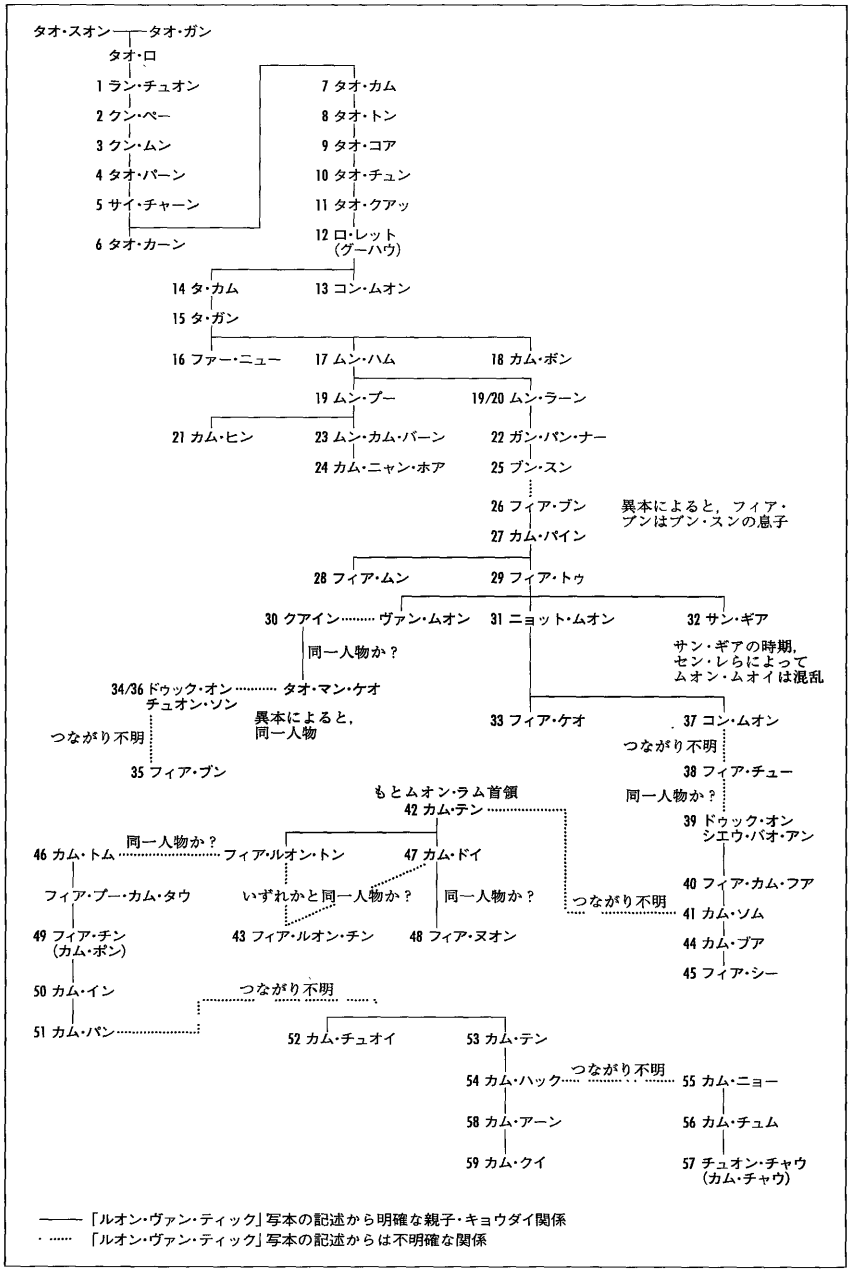

図4　トゥアンチャウ（ムオン・ムオイ）黒タイ首領一族系図

イの白タイ首領を頼っても収まらず、戦が繰り返された。最終的にはサン・ギアの兄ニョット・ムオンの息子フィア・ケオの即位によって終息した。この反逆事件の顛末は、長老会は首領にとってかわれないこと、貴族姓の者が平民姓の者に君臨することで秩序が保たれることを明示している。

五　歴史時間軸

『クアム・トー・ムオン』では、各首領の治世や事件がいつかを示すために、内側の相対的な尺度と外側の絶対的な尺度の二つを概ね併用している。内側の相対的な尺度とは、世代である。父子関係、婚姻関係、その人生がほぼすべての首領について記され、しかも父子相承の原則で首領の地位は継承される。父子関係をたどることで、どの程度世代が遡るかがわかる。

いっぽうで外側の尺度とは、宗主国側の歴史との関連づけである。ベトナムの王統史、ラオスの王統史との関連から過去の時点が示され、たとえばサムセンタイ王（位一三七三～一四一六）をはじめとする有名な外部の王が登場する。さらに、一九世紀頃の記述になると、干支を用いて記述される。

年代記記述の問題点

しかし、年代記は正確な史実を記しているのだろうか。この点に関しては、先述のラン・チュオン征戦経路をめぐる記述をはじめ、たくさん疑問の余地がある。

たとえばラン・チュオンが没した時期は、ラオスの王統史に依拠してファ・ムット、ファ・ケオという二王への言及から示されている。しかし、この二王の存在は不明である。また、特定不可能なベトナム皇帝の名前も数多く登場する。つ

まり、黒タイの民間にまで名を轟かせているラオスの大王やベトナム皇帝と黒タイ首領の間にある政治関係や婚姻関係を語ることで、首領の確たる権威を示す政治的意義こそが重要なのであろう。過去の時点を明示する意味は二の次である。

また、阮朝明命帝（ミンマンてい）期の回土帰流政策の実施（一八三三～一八三九）によって、黒タイ首領たちがそれまでよりはベトナム王朝の直接的な干渉を受けた。朝廷から非キン族地域へ流官が派遣されるとともに、非キン族子弟に漢字学習も行われた。そのせいか、一九世紀頃の記述になると、干支による年代記述が登場しはじめる。たとえば、壬午の年（一八八二年）に黄旗軍によって黒タイの諸領域が蹂躙されたという記事があるが、黄旗軍の侵入は一九世紀半ばの事件なので明らかに不正確である。さらに、首領や役職者による田地私有化の反対運動も庚午の年（一九三〇）であるはずが甲寅の年（一九一四年）として間違って記されたりしている。同様の不一致は他にもある。[8]

さらに気になることは、『クアム・トー・ムオン』では中国との関係が語られていないことである。先述の通り、一九世紀以前から広域な商業と流通の主体は漢族であった。しかもたとえばマイソンに一九〇三年に建てた黒タイ首領が立てた石碑にも、アラビア数字と黒タイ文字による西暦、漢字による清朝年号と阮朝年号が記され、当時の多重帰属の状況を示している。それを考えても不自然なのである。

中国との関係を語らないことには、おそらく政治的な含意がある。ルオン・ヴァン・ティックによる写本は、植民地期を経たあとに記述されたものである。一九世紀末にフランス領としてすでに画定していたラオスとトンキンへの帰属については語ることができたが、中国への帰属をも暗示させるような内容は、政治的に不都合だったのである。

こうした記述は、『クアム・トー・ムオン』の再生産のあり方にも起因している。新しいバージョンが作られる際、古いものは捨てられた。だから一九世紀末よりさかのぼる写本は継承されていないのであるが、写本制作者は必ずしも原本を正確に書写したのではない。意図的、非意図的に改編（変）しながら書写したのである。[9]

年代記記述の受容

繰り返すが、年代記は事件記述の客観性の点で、信頼できない記述を含んでいる。しかも多民族が雑居する西北地方において、自分たちの言語・文字で歴史を記してきたのは、ほとんど黒タイなどターイだけである。もちろん黒タイ年代記の記述は、彼らの視点に偏っている。その意味で、黒タイ年代記に依拠した従来の西北地方史は、再考の余地が大きい。では、なぜそれほどまで彼らの年代記の分析が、容易に西北地方史研究に取り込まれたのだろうか。その理由を最後に述べたい。

『クアム・トー・ムオン』は、地域の多数の人に葬式で読み聞かせるために生産、再生産された。その書写の過程で改編があった。しかし、書写者個人のあまり強引な解釈に基づいていたのでは、聞き手（読者）に受容されない。だからその内容は、ある時点での人々の集合的記憶を蓋然的に代弁しているはずである。つまりそこに書かれているのは、当該ムオンの人々にとっての事実、歴史認識である。

とはいえ『クアム・トー・ムオン』は、国家側にとって不都合な、たとえば国家領域の範囲に抵触する内容をあまり含んでいない。それは現存の写本が、現在の領域が画定したあとに再生産されたからである。つまりそれらは現地の人々にとっても、国家の立場に立つ人々にとっても受け入れられやすい内容に、すでに改変されているのである。

これからの西北地方史研究は、こうした年代記の特徴を認識したうえで、実証的に展開される段階に進むにちがいない。

▼注

（1）新谷忠彦編『黄金の四角地帯――シャン文化圏の歴史・言語・民族』慶友社、一九九八年、クリスチャン・ダニエルス他『自然と文化

そしてことば（3）特集〈国境なき山地民〉――タイ文化圏の生態史』葫蘆舎、二〇〇七年、など

（2）樫永真佐夫『東南アジア年代記の世界――黒タイの〈クアム・トー・ムオン〉』風響社、二〇〇七年、二四～三〇頁。

（3）Chương trình Thái học Việt Nam (biên soạn), *ăn hoá và lịch sử các dân tộc trong nhóm ngôn ngữ Thái Việt Nam - Kỷ yếu Hội nghị Thái học Việt Nam, lần thứ III tại Hà Nội*, Hà Nội: Nhà xuất bản Văn hoá Thông tin, 2002

（4）Tỉnh ủy, Hội đồng nhân dân, Ủy ban nhân dân tỉnh Sơn La, *Tỉnh Sơn La 110 năm (1895-2005)*, Hà Nội: Nxb Chính trị Quốc gia, 2005

（5）Cầm Trọng và Cầm Quynh, *Quắm Tố Mường (Kể chuyện bản mường)*, Hà Nội : Nhà xuất bản Sư học, 1960 や、Đặng Nghiên Vạn (chủ biên), CầmTrọng, Khà Văn Kiến Tòng Kim Ân や *Tư liệu về lịch sử xã hội dân tộc Thái*, Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội, 1977, など。

（6）Bùi Văn Tịnh, Cầm Trọng, Nguyễn Hữu Ưng, *Các tộc người ở Tây Bắc Việt Nam*, Ban Dân tộc Tây bắc Xuất bản, 1975 や Cầm Trọng, *Người Thái ở Tây Bắc Việt Nam*, Hà Nội: Nhà xuất bản Khoa học xã hội, 1978 など。

（7）樫永真佐夫「東南アジア北部における諸民族すみ分けの現在」『科学』七五～四、四五五～四五九頁、二〇〇五年。

（8）樫永真佐夫「（注釈）クアム・トー・ムオン――ムオン・ムオイにおける黒タイ年代記」『ベトナムの社会と文化』四、一六三～二四三頁、二〇〇三年。

（9）こうした写本文化の特徴は、新谷忠彦『タイ族が語る歴史――「センウィー王統紀」「ウンポン・スィーポ王統紀」』雄山閣、二〇〇八年も指摘するとおり、タイ文化圏に広く共通する。

（かしなが　まさお／国立民族学博物館准教授）